関西の名工
Master Craftsman of kansai

組紐職人 太田浩一さん

1966年、滋賀県大津市生まれ。1989年大学卒業後、1993年家業に入り、四代目・太田藤三郎さんに師事。滋賀県伝統的工芸品でもある組紐職人、2015年から有限会社藤三郎紐 社長。「内記台は、伊賀や京都にも展示されている台はあるけど、実際に使っているのは私と父だけ。「内記台で組んだ帯締めじゃないとあかん」とおっしゃるお客さまも多く、大切に残していきたいと思っています」

縦糸だけで構成される組紐で無限の柄を

細い絹糸を数十本合わせて組み、一本の紐に仕立てる「組紐」。現代では主に、帯締めや羽織紐などとして使われるから、着物を着る機会がそうない人なら「組紐といわれても縁がないなあ」と思うかも。「藤三郎紐」の五代目で組紐職人の太田浩一さんは、「みなさんに一番なじみのある組紐は、髪型の〝三つ編み〟かもしれませんね」。織物は縦糸と横糸で織られる。編み物はループの連続で編まれる。それらに比べて、「組紐は、縦糸のみでつくられるものをいいます。ですから、三つ編みは正式には〝三つ組〟ですね」「お正月のしめ縄も組紐の一種です」

組紐は、奈良・平安時代からお経の巻物の紐や袈裟の紐、お公家さんの衣装などに使われ、中世に入ると、武士の装束にも多用されるようになる。甲冑の鉄板を結びつけるには丈夫な組紐が必須で、刀の下げ緒や馬具などにも使われた。

組紐が、帯締めとして使われるようになったのは明治時代以降。時を同じくして、藤三郎紐は、江戸時代から明治時代へと変わろうとする慶応3（1867）年、滋賀県大津市逢坂で創業した。「これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関」と詠まれた、逢坂の関所付近に米屋を開き、副職として、峠を行き交う人たちに印籠の紐などを売ったのが始まり。しだいに帯締めの需要が増えて組紐を専業とし、帯締めを中心につくるようになって今に至る。

工房には、角台、丸台、三角台のほか、機織り機のような綾竹台や高台など、組紐を組むためのさまざまな台が並んでいた。「この組台は、まさに三つ編みのような組み方で帯締めを組むんですよ」と太田さんが見せてくれたのは、三角台。玉と呼ばれる、絹糸の束を巻きつけたものが三角形の台の右に4つ、左に3つセットされ、右上の玉（絹糸）を左下へ、次は左上の玉を右下へと移動して、交差させるように組んでいく。なるほど、三つ編みにそっくり。「三角台は、玉数が少なく組み方が単純な分、きれいに組むには糸の撚り加減、力の入れ具合が難しいです。素朴ですが適度な伸縮性がある、いい帯締めができ上がります」

帯締めは、色柄の美しさも大きな魅力。「どんな柄や組み方も、基本的にはこの台ひとつで組めるといわれています」という丸台を使って「ちょっとやってみますね」と太田さん。丸台にセットされた24玉（絹糸）を上下左右に次々移動させ、帯締めを組んで見せてくれた。「これは〝ささなみ〟という組み目が斜めになった組み方です。玉の動かし方によってさまざまな組み目、柄ができ上がります」。先ほどの三角台と違い、玉の動かし方が実に複雑で、「玉をまちがった位置に動かしてしまったら？」と聞いてみると、「逆にまちがいをきっかけに、新しい組み方、柄ができるかもしれません。それくらい、組紐の組み方、柄は無限なんですよ」

藤三郎紐の工房では、絹糸を染める工程から作業を始める。どんな色の糸をどう使って組むのかによっても、柄のバリエーションはさらに広がる。工房には、太田さんの父で四代目の太田藤三郎さんが高台で組んだという組紐もあり、そこには「摩訶般若波羅密多…」という般若心経の文字が組まれていた。組紐は複雑な文字を描き出すことも可能なのだ。

内記台だから組める、味のある帯締め

工房の奥側に内記台という珍しい組台があった。「うちの工房で、メインで使っている組台です。今、内記台を現役で使っているのは全国でうちだけです」と太田さん。「内記台は江戸時代中期、膳所藩（現在の滋賀県）の内記という武士が、歯車で動くからくり人形を応用して考案した組台と聞いています」。内記台は木製の手動式の組台で、手動で歯車を回すと、ガチャンと音を立てながら葉っぱ型の板が回転する。すると板の金具に引っかけた絹糸が右回り、左回りと回転して移動し、台にセットした40本の絹糸が中央で交差し合って、1本の組紐に組み上がっていく。絹糸が幾重にもクロスし合う動きは、万華鏡を見ているようだ。「昔ながらの台ですから、組み目が飛ぶこともあります。すぐに組み目を修正できる職人でないと内記台は扱えないですね」

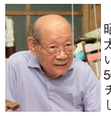
「昭和初期には、大津市内だけで5000人ほど組紐に従事する人がいて、町中でガチャガチャと内記台で組紐を組んでいました。大津の地場産業だったんです」というのは四代目の藤三郎さん。藤三郎紐は、今も数台の内記台を保管しており、太田さん自らストックから部品を取り出し修理などに使用するそうだ。

「内記台でつくる帯締めは、微妙な玉の落ち具合、力の入り具合がいいのか、ものすごく締めやすいんです。硬すぎず、柔らかすぎず、ぐっと締まってほどけにくい。これを一度、使うと他の帯締めは締められないというお客さんが多くいらっしゃいます」と太田さん。もちろん、無限の柄をつくり出すこともできる。

帯締めも、大半が電動モーターで動く機械製のものに代わった。「人間が月に行くような時代にね、こんな手動式の木の歯車の組台なんて、考えたらおかしいでしょ（笑）。でも、機械でちゃちゃっと組むのとは味が違うんです。これほどいい締め具合、風合いのよさは機械では出せない。だから残っているんです。ひとつの文化やね」（藤三郎さん）

帯締めは和装のただの飾りではない。朝、ぎゅっと締めたら緩むことなく1日きれいな着付けが保たれることが重要。機能性と美しさ。そのどちらも兼ね備えた帯締めを、組紐職人はどこまでも追求する。太田さんは、「帯締めならうちに頼めばまちがいない、藤三郎紐がいちばんやと言われるように取り組んでいます」

藤三郎紐では、「組み」の作業の前に膨大な準備を行っている。真っ白な絹糸を化学染料や草木染めで「染色」。染めた糸を小枠という枠に巻き取る「糸繰り」（写真は糸繰りの小枠）。組む紐の太さなどに合わせて何本かの糸をまとめる「糸合わせ」。合わした糸の「撚りかけ」。帯締め1本分の長さに揃える「経尺（へいじゃく）」を経て、玉に糸を巻きつけ組台にセットして、「組み」が始まる。



昭和12年生まれの四代目・太田藤三郎さん。「私が小さい頃はうちの工房にも40～50人の組紐職人がいて、ガチャガチャと内記台で作業していたんですよ」

有限会社藤三郎紐
滋賀県大津市逢坂1丁目25-11
TEL 077-522-4065
https://tozaburo-himo.com

三つ編みの要領で帯締めを組む、三角台。「シンプルな組台ですが、他に持ってらっしゃる組紐屋さんがあまりなく、珍しい台なんですよ」（太田さん）

工房にある、さまざまな組台。写真上右は、最もシンプルな角台。写真上左は、織物のように横糸にあたる糸を使う綾竹台。写真左上は、理論上はどんな組み方でもできるといわれる、丸台。このほかに、複雑な模様を組むことができる高台もある。

内記台で組まれた帯締めは、一般的に組まれた帯締めは、丸組（丸い紐）、平組（平べったい紐）などがあるが、内記台で組まれた帯締めは、いったん筒状に組まれ、そののち、ローラーで平らにすることで平べったい紐の帯締めが完成する。

「内記台」で帯締めを組み上げていく。手動で歯車を動かすと20枚の葉っぱ型の板が180度回転しながら絹糸を引っかけて移動し、組紐が組まれていくしくみ。回転のたびにガチャガチャと音がするので、「ガチャ台」とも呼ばれる。玉（絹糸）の並べ方と上部の輪の上げ下ろしで、さまざまな柄をつくりだすことができる。「たとえば白黒の順で玉を並べると横の柄に。白2本黒2本と並べると縦の柄に。3本1本と並べると亀甲柄になります」と太田さん。

「内記台」という希少な組台を使って、絶妙の締め具合の帯締めを組む